

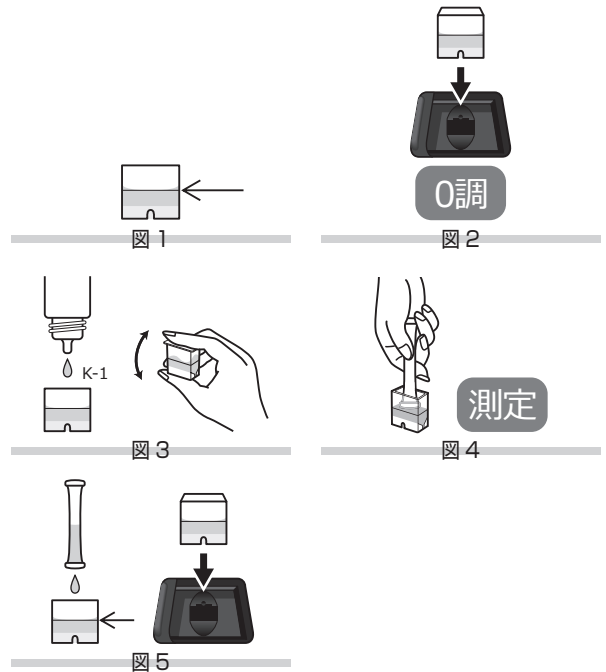
## ClO<sub>2</sub> 二酸化塩素

発色：無色→桃  
 測定原理：グリシンとDPD法  
 測定範囲：0.20～6.00 mg/L (ppm)  
 試薬：WAK-ClO<sub>2</sub> K-1 (滴ビン)、チューブ  
 測定時間：チューブに吸い込み後 30 秒

セル：専用カップ  
 使用波長：552 nm, 532 nm, 670 nm

### 測定方法

- 1.【ClO<sub>2</sub>】を押します。
- 2.【決定】押し、測定画面に切替えます。
3. 検水を、専用カップに1.5mL(線まで)採ります。(図1)
4. 専用カップをセルボックスに入れ、【0調】を押します。(図2)
5. K-1 試薬を2滴加え、蓋をして2～3回振ります。(図3)
6. パックテストのチューブに、専用カップの検水を全量吸い込み、同時に【測定】を押します。(図4)
7. 6. のチューブを軽く5～6回振り混ぜて、すぐに専用カップにチューブ内の測定液を静かに戻し、セルボックスに再びセットし静置します。(図5)
8. 経過30秒後に濃度が自動表示されます。



### 注意

1. 反応時間は厳守してください。反応時間を過ぎると発色が強くなります。特に、残留塩素、亜塩素酸イオン、塩素酸イオンなどの共存が考えられる場合は、この時間を厳守してください。
2. 発色時の最適 pH は7 です。pH が5～9 の範囲をこえる検水は希水酸化ナトリウム溶液または希硫酸等で中和してから測定してください。
3. 検水の温度は15～30℃で測定してください。
4. 二酸化塩素が40mg/L 以上の場合には測定値が低くなります。高濃度が予想される場合にはあらかじめ希釈をして測定してください。

### 共存物質の影響

内蔵の検量線は、標準液を用いて作成しています。他の物質の影響が考えられる場合は、公定法と比較するか、標準液添加法により測定値を確認してください。

右表は、標準液に単一の物質を添加した場合の測定値への影響データです。

海水は影響しません。

CN<sup>-</sup>、Fe<sup>2+</sup>、NO<sub>2</sub><sup>-</sup>等の還元性物質は二酸化塩素を消費します。

酸化性物質は正の誤差を生じます。

I<sup>-</sup> が共存すると残留塩素も測定されます。

1000mg/L以下は影響しない	…B <sup>3+</sup> (ほう酸)、Ca <sup>2+</sup> 、Cl <sup>-</sup> 、Cr <sup>3+</sup> 、F <sup>-</sup> 、K <sup>+</sup> 、Mg <sup>2+</sup> 、Mn <sup>2+</sup> 、Na <sup>+</sup> 、Ni <sup>2+</sup> 、NO <sub>3</sub> <sup>-</sup> 、PO <sub>4</sub> <sup>3-</sup> 、SO <sub>4</sub> <sup>2-</sup> 、Zn <sup>2+</sup>
500mg/L	// …Al <sup>3+</sup> 、亜塩素酸イオン、塩素酸イオン
250mg/L	// …NH <sub>4</sub> <sup>+</sup>
50mg/L	// …Mo <sup>6+</sup> (モリブデン酸)
25mg/L	// …Co <sup>2+</sup>
10mg/L	// …Fe <sup>3+</sup> 、フェノール
5mg/L	// …Ba <sup>2+</sup>
1mg/L	// …Cu <sup>2+</sup> 、残留塩素
少しでも影響する	…Ag <sup>+</sup> 、Cr <sup>6+</sup> (クロム酸)、Fe <sup>2+</sup> 、NO <sub>2</sub> <sup>-</sup>

### 試薬に関するお知らせ

バックテストに付属の使用法をご参照ください。

測定液は約 pH7 です。